

① 自然環境

竹田市は九州のほぼ中央、大分県では南西部に位置し、北にくじゅう連山、西に阿蘇外輪山、南に祖母山系を控え、1,000mを越える山々に囲まれている。また、市の東側は豊後大野市及び大分市、西側は熊本県、南側は宮崎県、北側は九重町及び由布市に接しており、中心市街地から県都大分市まで約50km、西方の熊本市まで約70kmの位置にある。



地勢は、周囲を九州山地の山々に囲まれた標高 250m の盆地から標高 900m 程度の高原地域を経て、標高 1,700m 級の山々が連なる山岳地帯まで起伏に富んでいる。西部は阿蘇外輪山から続く阿蘇火砕流により形成された大地が広がり、大規模な農業地帯が形成されており、北部はくじゅう連山の南麓に広がる広大な高原地域である。市域は、東西約 24km、南北約 36km、総面積は 477.7km²であり、全体の 70.9%が山林原野で占められ、農地は 14.6%、宅地が 1.8%と平坦部は少ないが、緑豊かな環境に恵まれている。

— 6 —

系は、盆地の中央部である市街地区域に集まることから、度々豪雨による水害が発生している。水害により大きな被害をもたらす反面、河川が与える水資源は豊富であり、竹田湧水群・老野湧水・小津留湧水など、良質の湧水が市内各所に見られ「名水の里」として知られている。北部の久住・直入地区には数多くの温泉が湧き出ており、特に「日本一の炭酸泉」といわれる長湯温泉は、古くから湯治場として利用され、今日も多くの観光客・保養客が訪れている。



竹田市の地勢

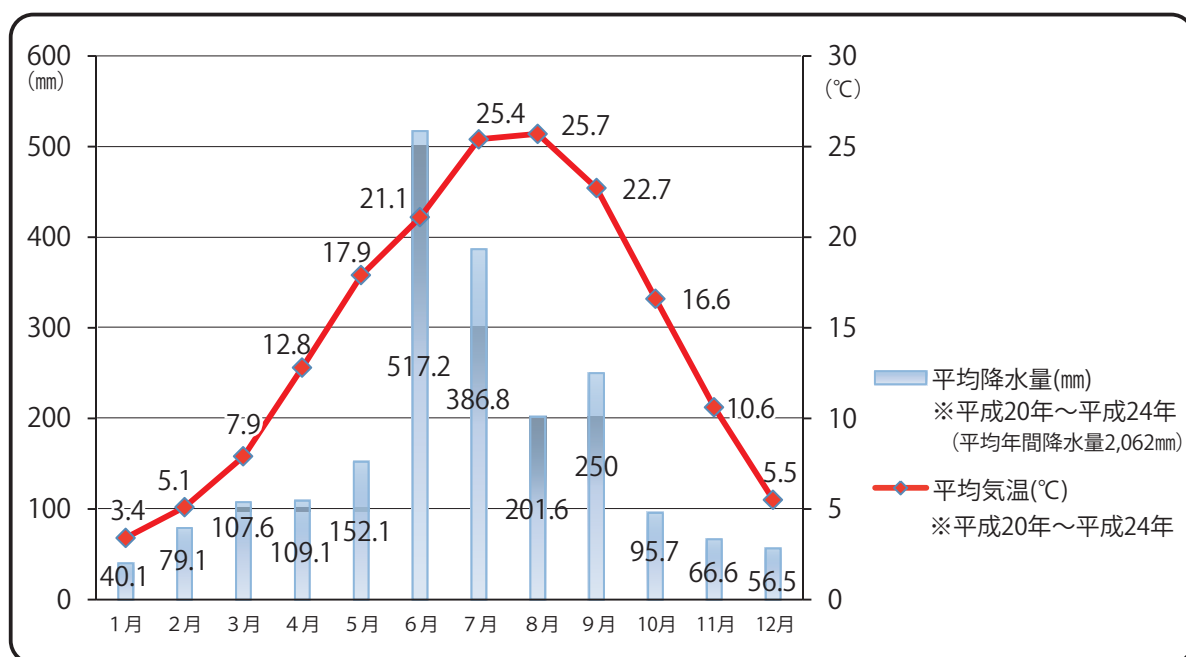
〈気 候〉

竹田市の地形は起伏に富んでおり、標高 1,000m を超えるくじゅう連山・祖母山系の山岳地域、標高 500 ～ 700m の久住高原・四原台地（菅生原・^{すこうばる}葎原・^{むぐらばる}恵良原・^{えらばる}柏原^{かしわばる}）などの高原地域、標高 250m 程の市街地を中心とする中央部の盆地地域に分けられ、それぞれの地域で気候に特徴がある。気候区分によると竹田の気候は内陸山地型に属するが、降水量・気温は地形により差がある。

降水量は盆地地域における過去 5 年間（平成 20 年～平成 24 年）の平均年間降水量は 2,062 mm となっている。また、高原地域の年間降水量は 1,800 ～ 2,000mm、標高 500m ほどの南部の山間地域では 2,600mm 程度、標高 1,000 ～ 1,700m の山岳地域では 3,300 ～ 3,500mm に達する。このように周辺山間地域での降水量が多いため、台風や集中豪雨により山間地域で多量に降った雨水が下流の盆地部へ集中し、盆地部では度々水害により大きな被害を受けている。

気温も標高により影響を受け、盆地地域の 8 月の平均気温は 25.7℃ であるが、夏の最高気温の平均は 34℃ と比較的高く、1 月の平均気温は 3.4℃ であるが冬の最低気温の平均は -6℃ となり夏と冬の気温差が極めて大きくなる。高原地域・山岳地域では夏は比較的冷涼であるが、冬場の冷え込みは厳しく、積雪も多くなる。月平均や年平均の気温は高度の増加により低下するが、夜間の気温は盆地の底部で低く、丘陵や尾根で高くなる「気温逆転」を示すことが多い。

竹田市（盆地地域）の平均降水量・平均気温（平成 20 年～平成 24 年平均）



（※気象庁データ参照）

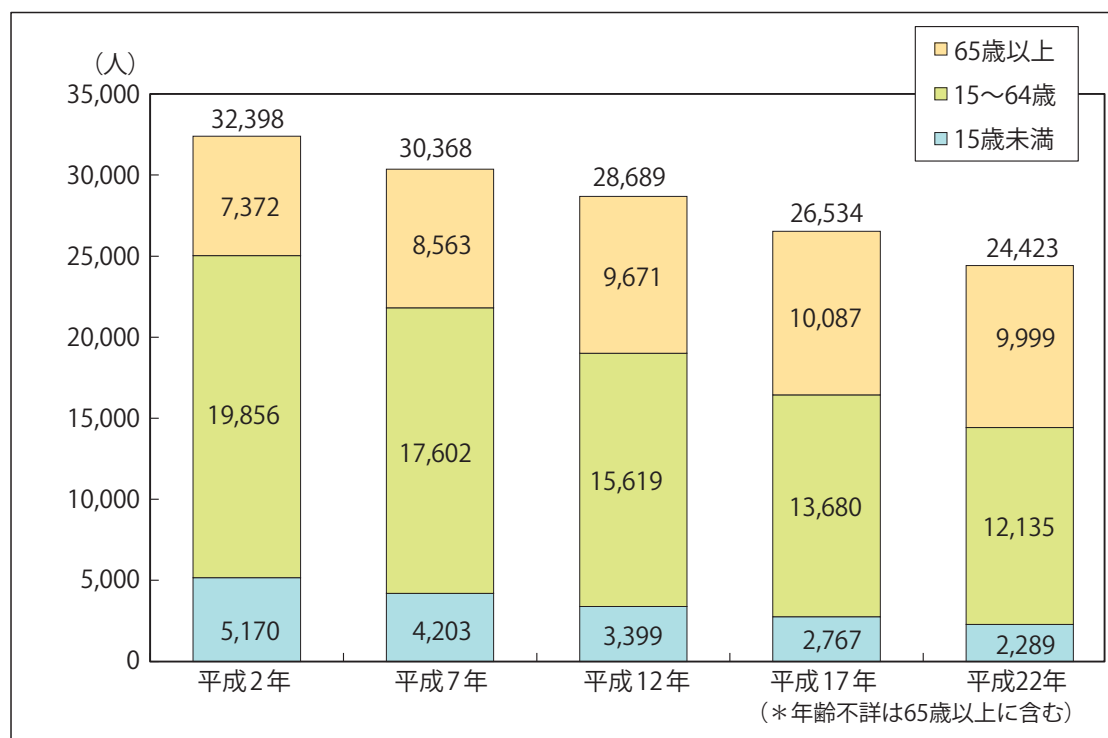
② 社会的環境

〈人 口〉

竹田市の人口は、平成 22 年国勢調査において 24,423 人と平成 2 年からの 20 年間で 7,975 人が減少（24.6%の減少率）しており、近年一貫して減少傾向にある。

年齢層別の人口を見ると、64 歳以下は減少する一方で、65 歳以上は増加しており、少子高齢化の影響が顕著である。

また、同時期における大分県全体の人口推移は約 2.3%の減少に留まっており、本市は県下において人口減少の著しい基礎自治体の一つとなっている。

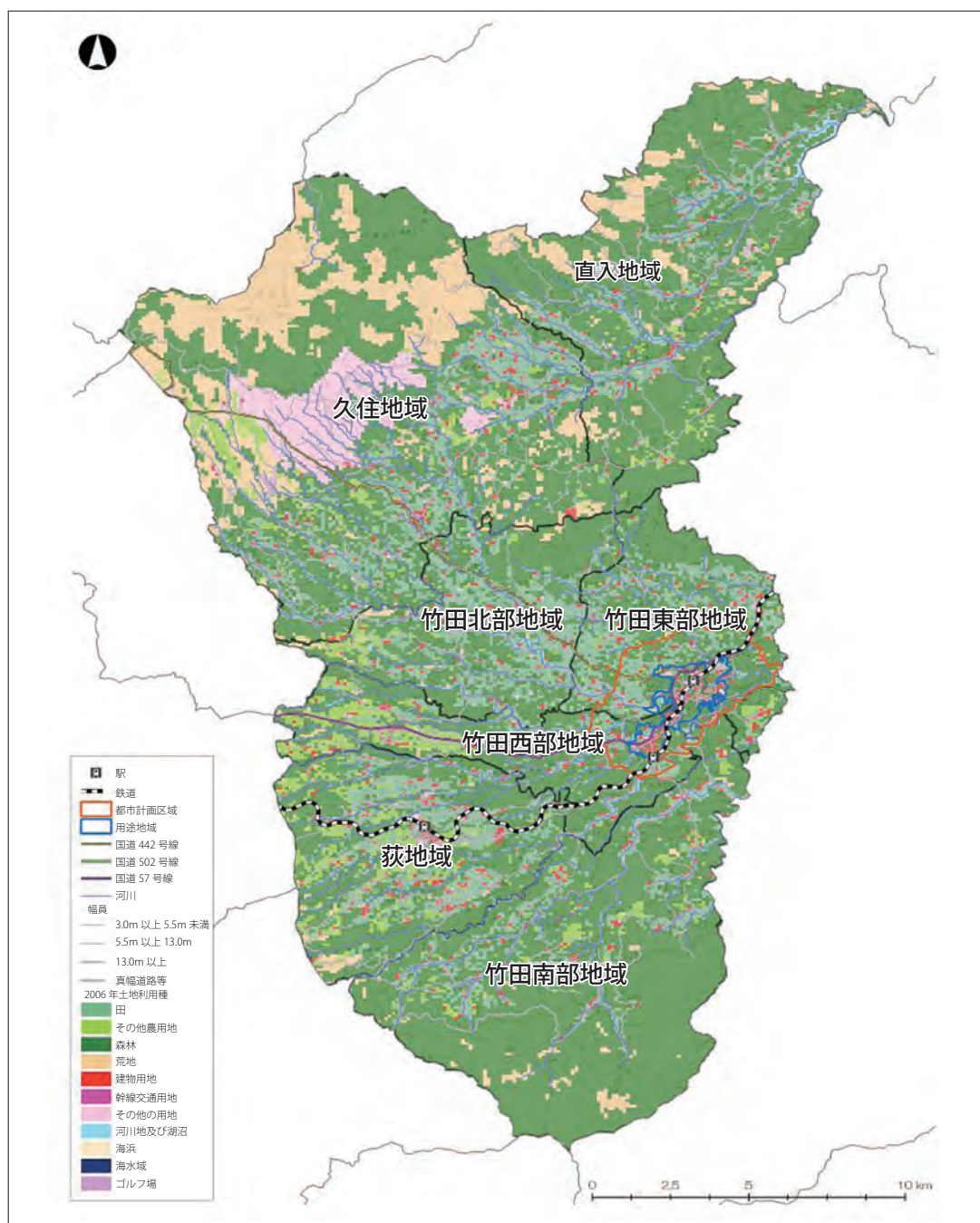


年齢別人口の推移：国勢調査 平成 2 年～平成 22 年

〈土地利用〉

竹田市の土地利用状況における周辺環境では、周囲をくじゅう連山、阿蘇外輪山、祖母傾山系に囲まれていることから、西から北にかけては阿蘇くじゅう国立公園地域、北から東にかけては神角寺芹川県立自然公園地域、南には祖母傾国定公園地域・祖母傾県立自然公園地域が指定されている。都市形成は竹田地域に見られ、市街地は用途地域が指定されている。

地形的な制約上、本市のほとんどが森林地域の感を受けるが、高原や平坦部を利用して農業地域が広がり、基盤整備等の農地整備が行われている地域においては、大規模な農業地帯が形成されている。



竹田市全域の土地利用状況（国土交通省 GIS データ）

〈自然公園地域〉

竹田市は、阿蘇外輪山、くじゅう連山、祖母傾山系など 1,000m を越える山々に囲まれた自然豊かな地形を保持していることから、阿蘇くじゅう国立公園、・祖母傾^{そぼかたむきこくていこうえん}国立公園、神角寺芹川県立自然公園、祖母傾県立自然公園などが公立の公園として指定されている。

阿蘇くじゅう国立公園は、昭和 9 年（1934）に指定された大分県と熊本県にまたがる面積 72,678ha の国立公園で、竹田市では北部地域のくじゅう連山がこれに含まれる。位置的には、九州のほぼ中央部にあり、活発な火山地帯であるが、標高 1,000m を超える高原地帯では野焼きが行われている。地域一帯に草原景観が広がり、九州でも有数の観光地として知られている。祖母傾国立公園は、大分県と宮崎県にまたがる山岳地帯で、22,000ha の面積を有し、昭和 40 年（1965）に指定された。その範囲のほとんどを原生林が占め、特別天然記念物のカモシカや県指定天然記念物の祖母山系イワメの生息域でもある。

神角寺芹川県立自然公園は、竹田市直入町を流れる芹川と神角寺（豊後大野市）を中心とした面積 10,065ha の自然公園で、昭和 26 年（1951）に指定された。芹川流域には、長湯温泉や小津留湧水や芹川ダムなど、豊富な水資源を保有している。

祖母傾県立自然公園は、昭和 26 年（1951）に指定された自然公園である。面積は 14,123ha で、祖母傾国立公園の隣接地域が指定されている。



大分県内の自然公園分布図 [大分県ホームページより]

〈産 業〉

竹田市の産業は、古くから農業が基幹産業であり米作を中心として、トマト、ピーマン、イチゴ、小ねぎなどの施設野菜やレタス、キャベツ、スイートコーンなどの露地野菜、花き、椎茸、カボス、サフラン、果樹などを組み合わせた複合経営、また、肉用牛の生産などで農家の生計が維持されている。

しかし、農業のみで生計を維持する専業農家は農家全体の25%で、7割を超える農家が他に収入を求める兼業農家となっており、これは増加傾向にある。

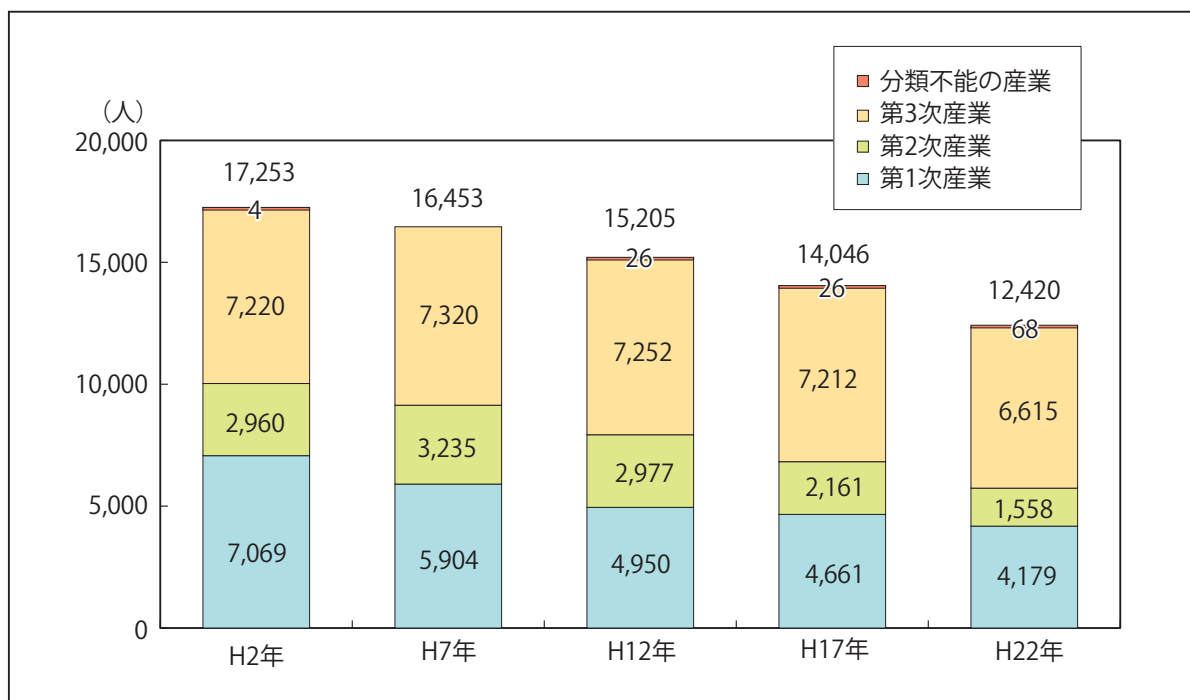
商業は、市の中心市街地と玉来地区、荻町、久住町、直入町の商店街を核に形成されている。このうち玉来地区を中心とする国道57号沿いには、大型店の出店が見られる。かつては奥豊後の中心地として、豊後大野市や熊本県阿蘇市等の一部も商圈としていたが、商圈人口の減少や道路交通網の発達、消費者ニーズの多様化等により、市民の購買力はかなり市外へ流出していると考えられる。

近年は、城下町や久住高原、長湯温泉をメインに観光客数が増加に転じ、新たな出店も出てくる中で、観光産業の発展による今後の浮揚が期待される。

産業別就業人口構成比の推移では、第1次産業就業者数は、平成2年～平成22年の20年間で大幅に減少しており、その構成比においても、平成22年で33.7%と約7ポイントの減となっている。第2次産業就業者については、平成2年から平成7年までの期間は増加したものの近年は減少し、平成22年は12.5%と20年間のトータルでは約5ポイント減少している。

一方、第3次産業就業者の構成比については20年間で約12ポイント上昇し、平成22年度は53.3%と全産業の半数以上を占めるようになっている。

平成22年の国勢調査によると、15歳以上の就業者12,420人のうち、サービス業が4,110人(33.1%)となり、これまで1位であった農業従事者4,058人(32.7%)を上回った。次いで卸売・小売1,383人(11.2%)、建設業894人(7.2%)と続き、上位4種で84%に達している。これを10年前、平成12年の国勢調査と比較すると、農業が807人、卸売・小売が811人、建設業が821人とそれぞれ減少している。特にこの3種の職種については、高齢化や後継者不足、購買力の低下などに起因する減少となっており、担い手確保が喫緊の課題となっている。



産業人口の推移：国勢調査 平成2年～平成22年

産業大分類	平成2年		平成7年		平成12年		平成17年		平成22年	
	総数	構成比	総数	構成比	総数	構成比	総数	構成比	総数	構成比
農業	6,943	40.2	5,796	35.2	4,865	32.0	4,582	32.6	4,058	32.7
林業	121	0.7	102	0.6	85	0.6	77	0.5	116	1.0
漁業	5	0.0	6	0.0	-	-	2	0.0	5	0.0
第1次産業	7,069	41.0	5,904	35.9	4,950	32.6	4,661	33.2	4,179	33.7
鉱業	5	0.0	6	0.0	7	0.0	0	0.0	1	0.0
建設業	1,668	9.7	1,880	11.4	1,715	11.3	1,325	9.4	894	7.2
製造業	1,287	7.5	1,349	8.2	1,255	8.3	836	6.0	663	5.3
第2次産業	2,960	17.2	3,235	19.7	2,977	19.6	2,161	15.4	1,558	12.5
卸売・小売業	2,481	14.4	2,415	14.7	2,194	14.4	2,601	18.5	1,383	11.2
金融・保険業	197	1.1	172	1.0	141	0.9	140	1.0	114	0.9
不動産業	16	0.1	11	0.1	15	0.1	11	0.1	42	0.4
運輸・通信業	612	3.5	615	3.7	546	3.6	429	3.1	439	3.5
電気・ガス・水道	48	0.3	51	0.3	45	0.3	24	0.2	13	0.1
サービス業	3,169	18.4	3,357	20.4	3,623	23.8	3,428	24.4	4,110	33.1
公務	697	4.0	699	4.2	688	4.5	579	4.1	514	4.1
第3次産業	7,220	41.8	7,320	44.5	7,252	47.7	7,212	51.3	6,615	53.3
分類不能の産業	4	0.0	0	0.0	26	0.2	12	0.1	68	0.5
総数	17,253	100	16,459	100	15,205	100	14,046	100	12,420	100

産業分類別人口（15歳以上）の構成比：国勢調査（単位：人、%）

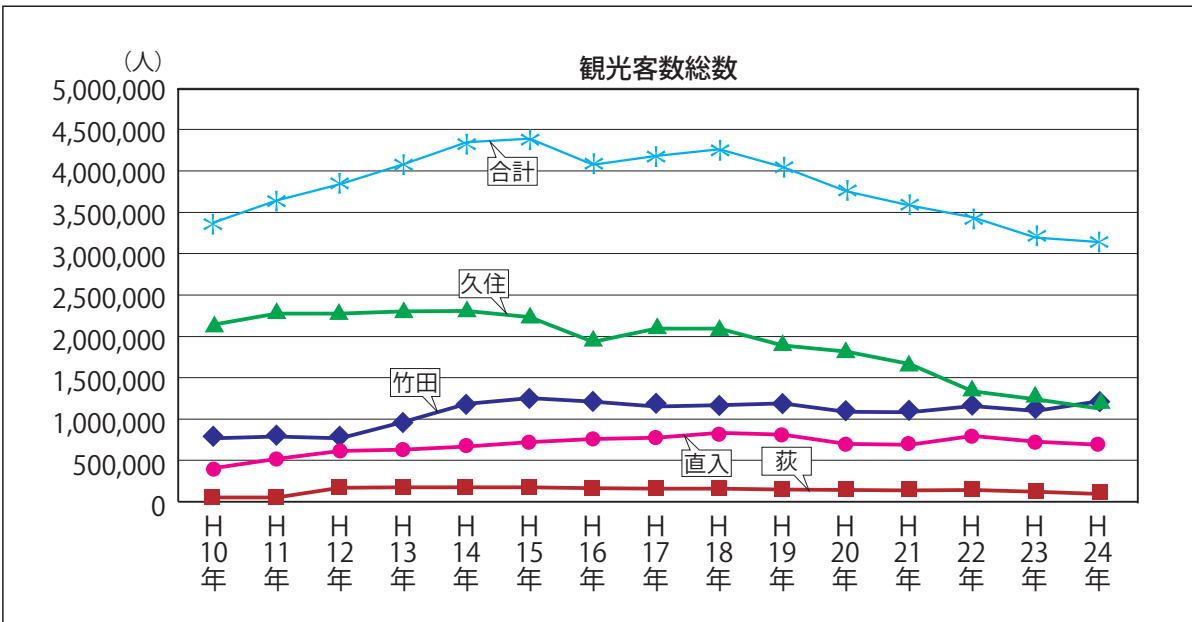
また、本市は、全域に九州を代表する山岳、この山岳を源とする豊富な水資源、早くから拓けた歴史文化に裏付けられた多くの遺産を保有していることから、これらは観光振興の面でも重要な位置付けにある。訪問者にとっては、非日常が体験できるスポットとなっており、こうした自然や文化遺産は、観光資源としても本市の貴重な財産となっている。

近年における本市の観光者の入込数は、市町合併以降、平成18年を境に減少傾向にある。

【竹田市観光客数の推移】 (単位：人)

	H10年	H11年	H12年	H13年	H14年	H15年	H16年	H17年
竹 田	759,061	777,835	760,257	957,977	1,176,063	1,244,271	1,200,462	1,141,434
荻	71,335	72,058	188,465	192,818	194,034	194,750	181,641	174,600
久 住	2,139,900	2,276,200	2,276,631	2,301,293	2,309,498	2,232,440	1,931,761	2,093,028
直 入	404,166	516,747	612,134	628,455	665,516	720,768	758,410	775,006
合 計	3,374,462	3,642,840	3,837,487	4,080,543	4,345,111	4,392,229	4,072,274	4,184,068

	H18年	H19年	H20年	H21年	H22年	H23年	H24年
竹 田	1,161,048	1,177,978	1,077,763	1,071,959	1,146,996	1,089,646	1,209,507
荻	175,482	165,180	162,402	156,921	162,789	138,371	113,464
久 住	2,091,635	1,893,159	1,813,643	1,665,979	1,334,948	1,241,502	1,129,767
直 入	832,764	811,311	698,117	689,614	795,676	724,065	687,862
合 計	4,260,929	4,047,628	3,751,925	3,584,473	3,440,409	3,193,584	3,140,600



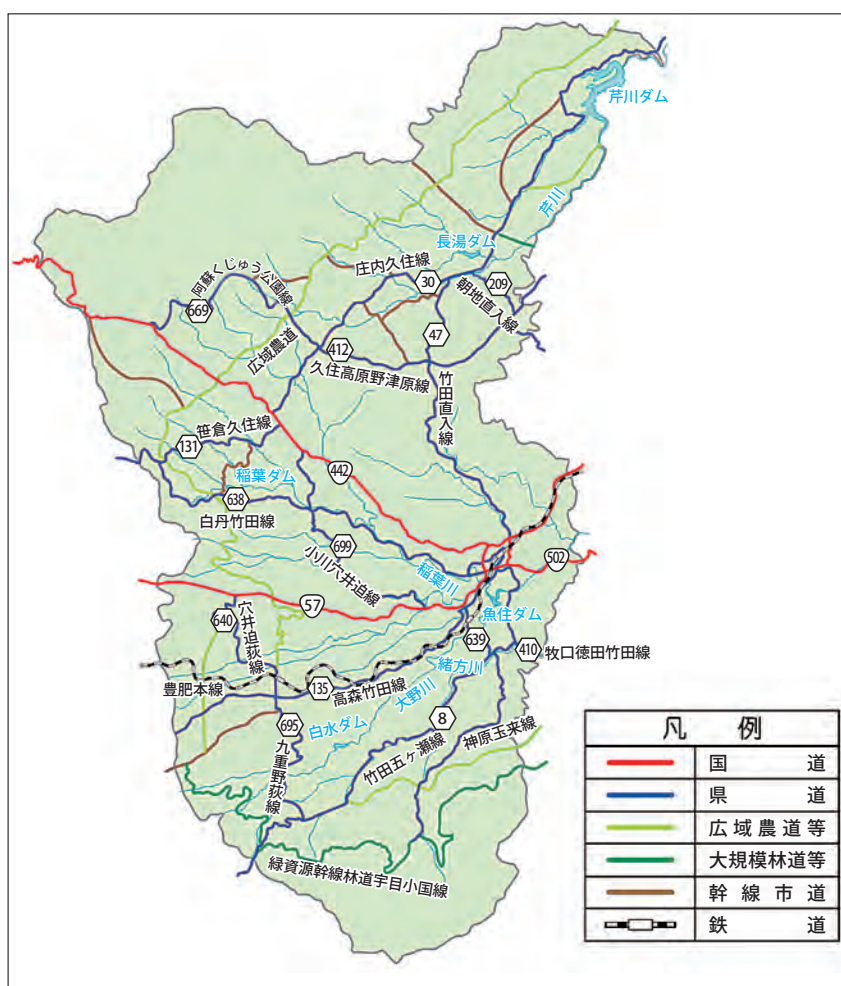
〈交 通〉

竹田市の道路網は、市内を東西に走る国道 57 号が九州の東西を連結する道路として大分市、熊本市の両県都を結び、国道 442 号は、大分市と久住、熊本県小国町を経て福岡県大川市を、国道 502 号は、臼杵市から豊後大野市を経て竹田市を結ぶ広域的な道路となっている。竹田市はこれらの国道の中間点として、また近隣の市町村を結ぶ主要地方道の道路交通網の拠点として重要な位置にある。

県道は、県道竹田直入線が竹田地域と直入地域、県道庄内久住線が久住地域と直入地域、竹田地域と荻地域は県道高森竹田線で結ばれているほか、県道久住高原野津原線が久住・直入地域を大分市へ結ぶ。

国道・県道以外の道路では、広域農道が荻地域を起点として西北部を通り直入地域まで続いており、南部を大規模林道宇目小国線が横断する。

鉄道は大分と熊本を連絡する JR 豊肥本線が走り、本市はその中間点として、九州中央部の交通の要所として位置付けられる。鉄道駅は豊後竹田駅・玉来駅・豊後荻駅の 3 駅があり、大分市への所要時間は約 60 分、熊本へは約 100 分である。この 3 駅において最も利用客が多いのは豊後竹田駅である。全体の乗降客数は減少傾向にあるものの、通勤・通学をはじめ、観光振興にも寄与していることから、公共交通機関として重要な役割を果たしている。

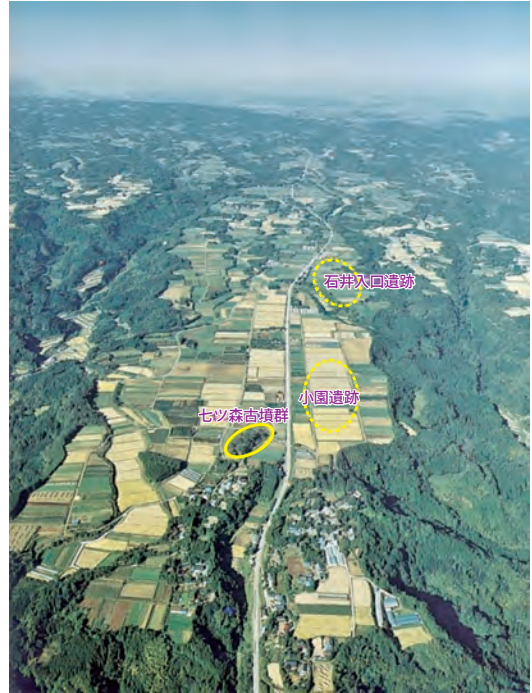


竹田市の道路交通網(竹田市総合計画)

③ 歴史的環境

〈原 始〉

竹田市には旧石器時代から古代までの多くの遺跡が残されており、その調査研究は明治時代の後半からすでに始められている。大正時代には七ツ森古墳群（昭和34年(1959)史跡指定）の発掘調査と報告書が刊行される等、考古学研究の総合的な調査が行われ、学史・学術的にも大きな成果が残されている。昭和30年代後半からは遺跡の分布調査も盛んに行われるようになり、別府大学や竹田高等学校民俗クラブによる各遺跡の発掘調査も行われ、その状況が明らかとなった。昭和50年以降からは記録保存を目的とした発掘調査も開始されることとなる。その成果は、各遺跡の発掘調査報告書に詳細が掲載されているが、大分県を代表する大野川、大分川の各水系による文化の違いが顕著化するようになってきた。



菅生台地

大野川の源流域である市の西側に位置する荻町や菅生台地では、縄文時代早期に営まれた集落跡や洞穴が調査され、大分県の縄文時代における指標となるヤトコロ式や上菅生・下菅生式等の土器が出土しているが、縄文時代晩期から弥生時代前・中期の遺跡や遺物は激減し、空白の時代と言ってよい状況となっている。菅生台地での集落がピークを迎えるのは、弥生時代後期～終末に至る時期で、七ツ森古墳群の周辺からは^{おびただ}夥しい数の竪穴住居跡とそれに伴う大量の遺物が出土しており、在地色の強い土器が各時期を通じて多く見られる。その中で特筆すべきは、^{ま せい せき}磨製石^{ぞく}鏃の多さと^{ごかんきょうへん}後漢鏡片及び^{こがたぼうせいきょう}小型仿製鏡の出土である。石鏃は、当時の生活基盤のあり方を示し、鏡片は権力問題について分析できる資料となる。ところが、古墳時代になると台地上の巨大な集落は忽然と姿を消してしまい、河川沿いに小さな集落が造られるようになる。菅生台地周辺で見られるこのような問題についての研究は、古代国家の成立過程を考える重要な資料となり注目されている。また近年行われ



下坂田西遺跡
(縄文時代後・晩期の集落遺跡)

た大野川の支流稲葉川周辺での発掘調査では、縄文時代後期から晩期の竪穴住居跡を伴う集落遺跡である下坂田西遺跡や古代の集落跡も確認され、大野川源流域から上流域の様相が更に解明されつつある。

大分川の源流域となる市の北東側にある久住町都野や直入地域の調査では、大野川流域とは異なり、主に弥生時代中期から中世に至る遺跡が多く発見されている。弥生時代中期後半の竪穴住居跡からは、肥後系、北部九州系、大分平野沿岸部の土器とともに石包丁も出土することから広域な交流と比較的早い時期での稲作の開始が想像される。また、弥生時代後期から古墳時代になると大量の鉄器も出土するようになる。集落の中には墓域が計画的に形成され、竪穴住居跡の大きさや副葬品等から支配者層の存在が窺えるようになる。そして古墳時代後期には、南方産のゴホウラ貝製の装身具や鹿角製の装飾が施された剣を副葬した長湯横穴墓群が出現する。

〈古 代〉

律令体制下では、現在の竹田市はほぼ全域が直入郡に含まれ、各施設が整備される。郡衙の位置等は不明であるが、駅等の施設と考えられる遺跡やそこを支えたと思われる集落跡が出されており、墨書土器や硯などの遺物が出土している。

和銅6年（713）に朝廷からの命により注進された「豊後国風土記」には「直入の郡、郷は四所 里は十一、駅は一所なり」と記述があり、直入郡には四つの郷があり、駅が1ヶ所あったことがわかる。郷については柏原郷と救葦郷（朽網郷）の記述はあるが他の二郷の記述がない。

「和妙抄」には三宅郷・直入郷の記述があり、記載されていない二郷は三宅郷と直入郷であったと推察できる。

柏原郷は現在の竹田市荻町・竹田市菅生一帯、救葦郷（朽網郷）は竹田市久住町都野地区・竹田市直入町一帯、三宅郷は竹田市の東部地域、直入郷は竹田市城原地区・竹田市久住町一帯であったと考えられる。

古代の直入郡はどのような所であったのか、「風土記」では禰疑野、宮処野など「野」の字が付く地名の記載が目につく。天平8年（736）の「豊後国正税帳」では、直入郡の正税稲穀は他郡に比べ極めて少ないことがわかる。

また、建久8年（1197）の「豊後国図田帳」に記載される直入郡の田数は「田代百六十丁余」



石田遺跡から出土した墨書土器

と記載されており、豊後国の他の郡に比べると田数が桁違いに少なく、特徴的な記述として牧馬の検校、紫草の管理がある。

このことから、古代の直入郡は、「野」と呼ばれるくじゅう連山及び阿蘇外輪山から広がる広大な高原地域の草地を利用した牧馬と古代における高貴な色の染料である紫草の生産を水田の乏しい郡を支える糧としていたと考えられる。

〈中 世〉

古代以来、直入郡には牧馬があり馬を巧みに操る者が多く住んでいた。天長3年（826）の太政官符によると太宰府に選士1,720人が置かれ、この選士のほとんどは弓馬が不得手であったが、「豊後国大野・直入両郡は、騎獵之兒を出す」「兵において要となれり」とある。馬を操り、狩獵を得意とする人々がこの地域に多くいたことを示している。

伝承ではあるが、猪鹿狼寺（竹田市久住町）の縁起では、建久4年（1193）に源頼朝が富士の巻狩りを行うに当たり、梶原景高と仁田忠常を阿蘇大宮司へ派遣し、巻狩りの作法を習わせた。二人はその帰り、久住山の山麓で実際に巻狩りを行ったと伝えられている。このようにこの地域には、牧と狩獵の伝統があり、中世まで伝えられてきた。この牧と狩りの世界が、源為朝と緒方三郎これよし惟栄に代表される豊後武士団の登場へと繋がる。

源為朝は、源氏の棟梁源為義の八男として生まれる。為義は嫡男義朝を東国へ派遣し、鎌倉を拠点に東国武士団を源氏の勢力に取り込んでいった。

一方で為朝を九州（豊後）へ派遣し源氏の勢力の扶植に努めた。為朝は「豊後おとなしがはら」に居住したとされる。「おとなしがはら」の地名は現在残されていないが、直入郡から玖珠郡にかけて源為朝の伝説が数多く残されており、直入・玖珠郡に広がる草原地帯に為朝の拠点があった可能性が高い。

なぜ、為朝は豊後国府から遠く離れたこの地に拠点を置いたのか、その時代直入・大野両郡は豊後大神氏の一族である緒方氏・大野氏の本拠地であった。大野氏の系図によると為朝ははじめ玖珠郡に居住し、直入郡騎牟礼きむれに城を築き、その後三宅郷へ移ったとされ、豊後大神氏も為朝の配下となったと推察される。

為朝は草原地帯の馬の扱いに巧みな一族を配下にするため、この地へ入ったと思われる。こ



源為朝が築城したとされる騎牟礼城跡

の一族から源平合戦で活躍し「平家物語」に語られる、豊後国において大きな力を持った武士団の棟梁である緒方三郎惟栄が登場する。緒方三郎惟栄は反平家として活躍し、太宰府から平家を追い落とし、平家方に与した宇佐大宮司を攻撃し、平家追討軍の源範頼の軍を九州へ渡す支援を行うなど、平家滅亡に大きな貢献をした。しかし、源頼朝と仲違いをした源義経を九州へ迎えるため播磨国大持浦を義経と共に出航したが捕えられ、上野国沼田荘へ流され、豊後大神氏の勢力は衰退してゆく。岡城は、緒方三郎惟栄が義経を迎えるために築城したと伝えられる。

鎌倉時代になると、大友氏が豊後国守護として入部する。大友氏は一族を豊後国各所の地頭として任命し、志賀氏や入田氏、朽網氏^{くたみ}など大友氏一族が台頭しはじめ、大友体制下では在地による領国経営を行い周辺からの侵攻に備えて広大な山城を形成する。

志賀氏は大友初代能直^{よしなお}の八男能郷^{よしさと}を祖とし、延応2年(1240)大野荘志賀村(朝地町)半分地頭職を譲られて土着し、志賀氏を名乗るようになった。この志賀氏と直入郡との関係は、南北朝の動乱期の建武3年(1336)玖珠城の戦いに端を発する。玖珠城において反旗を翻した大友7代氏泰の兄貞順(南朝方へ)に加担した入田郷を半分ずつ知行する入田氏、出羽氏は戦死し、北朝方に没収された。その後、入田郷の所領は降参半分の法により、入田氏、出羽氏の所領は以前の半分とされた。入田郷の所領4分の1をそれぞれ知行する権利を残したことになる。

しかし、戦死した出羽宗雄の子(宗房)が幼いため、宗雄の妻は、宗房の扶助を志賀頼房に依頼して、成人になっても扶助し、志賀氏に従うことを約束している。後の正平13年(延文3年・1358)、その所領は志賀氏に譲与された。

これにより、志賀氏は直入郡に所領を持つようになったが、本格的な直入郡進出は直入郷代官職と検断職(刑事犯人の検察・断罪)を預けられた応安2年(正平24年・1369)以降と考えられる。また、大船山の山裾に築かれた山野城^{くたみ}は、朽網氏に関連する山城であり、その麓^{うえんじょう}の上城遺跡からは朽網氏の館跡と考えられる屋敷地を区画する溝とその内側に夥しい数の建物跡が検出された。各遺構の内部からは、大友氏により盛んに行われた海外との交易によりもたらされた外国の輸入陶磁器が大量に出土している。



「INRI」が刻まれる原のクリシタン墓碑

大友氏による豊後支配は大友21代義鎮^{よししげ}(宗麟^{そうりん})

の時に最盛期を迎え、豊後府内は大友氏拠点として西日本有数の都市として栄え、キリシタン大名であった義鎮によりキリスト教の布教が盛んに行われた。豊後には5万人の信者が数えられたとされる。直入郡でも布教が行われ朽網（現直入町長湯・久住町都野）では布教のための施設が設けられたと伝えられており、直入町原には「INRI」と記されたキリシタン墓が現存する。大友氏の支配も天正14～15年（1586-1587）の島津氏の豊後侵攻によりその支配体制の衰退を招き、文禄2年（1593）大友22代^{よしむね}義統は文禄の役における朝鮮半島での失態を理由に豊臣秀吉より豊後国を除国され、大友氏の豊後支配は終焉を告げた。

〈近 世〉

大友氏の除国後、文禄3年（1594）に播州三木（兵庫県）より中川^{ひでしげ}秀成がこの地へ入部し、大友氏と共にこの地を去った志賀氏の居城に入城し、領国経営のための施策を展開する。秀成は入部後まもなく城の造営に着手する。天神山を本丸とし、西側の岡村の辺りに上級家臣の屋敷を設け、志賀氏時代の大手門であった下原門を搦め手とし、城の西南に大手門、北側に近戸門を新たに開いた。



「御城真景図」に描かれた岡城

3代藩主^{ひさきよ}中川久清により寛文4年（1664）西の丸が造営され、岡城は急速に中世の山

城から近世城郭へと移り変わっていった。岡城の築城と同時に城下町の建設も行われた。城下町の設置場所は稲葉川の氾濫により沼沢を形成していた。これを造成して城下町の基盤が形成され、町割りがなされた。町割りは中央に町家群を配し、これを取り囲むように北から西にかけて寺が配置され、北、東、南側に武家屋敷が配置された。

町家は主に本町、新町、府内町、田町、上町の5町をもとに構成されていた。本町は家数87軒、新町の家数51軒、同じく府内町54軒、田町54軒、上町44軒の家数で、都合290軒によって町家が構成されていたようである。これらの町家の住人は入部時同行者ではならず、現玉^{たま}来地区（城下町の南東約2km）から本町へ53軒分を移し、他は十川^{そうがわ}地区（城下町の西約2km）からも移住させている。

以上が当初の城下町の形成状況であるが、その後寛文5年（1665）に古町が新たに造営され、城下町の拡大をみている。古町は古くから百姓等が住まいしていた地区であり、これに町割りを施し、城下町を拡張している。

古町を除く当初建設された町割りは東西に長いほぼ長方形の区割りを基調としている。南北通り筋は西側から本町筋、新町筋、横町筋でそれぞれの町が構成され、東西通り筋では南側から上町筋、田町筋、府内町筋にそれぞれ町が形成されている。上町筋及び田町筋は本町筋と接しT字路を形成している。

また、新町筋と府内町筋もT字路を形成している。新町筋に対し、上町筋や田町筋は交差している。従って新町に対して上町や田町といった町の区域も交差している。この町の区域の交差をみると、南北に通る新町が東西に通る上町、田町を切ったように延び、本町も同様であることから、町割りでは東西筋に対して南北筋が優位であることが理解できる。古町の町割りはほぼ方形を基調として行われており、中央の北西から南東にかけての道筋を中心として長く古町が形成されている。この古町には2条の南東・北西方向の道筋が交差している。また、古町を中心として、その両側には武家屋敷が配置されていた。



岡藩の城下町（ は町家）

城と城下町の整備に加え岡藩政の確立のため、領内の検地や木浦・尾平鉾山きうら おびらの開発も実施し、3代藩主久清は熊沢蕃山くまざわばんざんを岡山から招き山林や水利問題などの経済政策を講じたと云われ、三宅山・保全寺山・城原山などの植林や城原井路・緒方井路などの灌漑水利施設の建設が実施され、領内の生産性の向上が図られた。また、天明3年（1783）に竹田城下町を訪れた備中国（岡山県）の古河古松軒は「町は大概よきまちにして諸品自由の地なり、（中略）萬事此城下ならでは調ひかたき故に、何に不足なきように商人たくはへ置とみたり、寺院も数多く見へ侍りぬ」（「西遊雜記」）と城下町の繁栄ぶりを伝えている。

岡藩中川氏は、多くの大名が改易・転封を繰り返すなか13代、約270余年の間、この地域の支配を行った。岡藩の城下町は江戸時代以降、奥豊後の政治・文化の拠点として栄え、田能村竹田・瀧廉太郎・朝倉文夫・廣瀬武夫などの偉人を数多く輩出している。

〈近・現代〉

明治4年（1871）、廃藩置県により岡藩は岡山県となりその後大分県直入郡と定められ、行政区画が定められた。明治10年（1877）に起こった西南戦争では、西郷軍の一隊が竹田町を占

掘し市街地を中心とする地域で西郷軍と政府軍の激しい戦闘があり、1,200戸以上の家屋が焼失した。

江戸時代以降、城下町は町家が密集しているため、度々大火に見舞われ多くの町家が火災に遭っており、町内に水を引き、生活用水や防火用水に活用することが長年の懸案とされてきた。明治13年（1880）に玉来川の水を隧道で竹田町へ引込み稲葉川に注ぐ稲葉川疎水計画が完成し、町内の用水の確保が可能になった。



町家が密集した城下町（大正～昭和初期）

この豊富な水資源を活かし四山社製糸工場の水車への利用をはじめ、明治32年（1899）に設立された竹田水電株式会社により竹田町・玉来町・豊岡村へ大分県初の電力供給が行われた。発電はその後、真門庵に第2発電所、宮砥村に第3発電所が建設され、周辺の13町村に電力を供給するなど、産業基盤の振興に繋がった。



竹田水力発電所 第1発電所（明治末期）

大正6年（1917）に竹田一犬飼（豊後大野市）間の乗合自動車定期便営業開始後、宮地（熊本県阿蘇市）・三重（豊後大野市）・久住など路線整備が竹田町を中心に整えられた。大正13年（1924）には豊肥線豊後竹田駅が開業し、機関庫・転車台・給水設備・給炭設備などを有する大分～熊本間の重要な駅として整備された。

また、竹田地域の地形は起伏があり、水田耕作には適地とは言い難い厳しい地理条件であるが、市内各所に水田が開かれ随所に棚田などの風景が見られる。これは灌漑設備の発達によるもので、規模の大きな灌漑設備が数多く造られている。これらの灌漑設備は、岡藩3代藩主中川久清が万治3年（1660）に熊沢蕃山を招き、その意見を取り入れて城原井路（寛文2年：1662 竣工）や刈小野井路（元禄3年：1690 頃竣工）などの灌漑設備の開発を進めたことによるものである。その後の藩主もこの政策を引き継ぎ、藩政時代に多くの灌漑設備が整備されたほか、音無井路



四山社・竹田水力発電所・銀行位置図

で、規模の大きな灌漑設備が数多く造られている。これらの灌漑設備は、岡藩3代藩主中川久清が万治3年（1660）に熊沢蕃山を招き、その意見を取り入れて城原井路（寛文2年：1662 竣工）や刈小野井路（元禄3年：1690 頃竣工）などの灌漑設備の開発を進めたことによるものである。その後の藩主もこの政策を引き継ぎ、藩政時代に多くの灌漑設備が整備されたほか、音無井路

（明治 25 年：1892 竣工）や明治岡本井路（昭和 11 年：1936 竣工）など明治・大正期に完成されたものもある。

灌漑設備の整備により市内各所に水田が形成されていったが、河川流域の狭小な谷底平野や傾斜地を利用した水田であり 1 筆あたりの水田面積が狭いことから、労働生産性が低く水田の基盤整備事業が早くから望まれていた。

昭和 50 年代以降現在まで水田や畑地の県営や団体営による農業基盤整備事業が行われ労働生産性の向上や農道・用排水施設の整備が行われている。水田耕作に適しない高冷地では畜産業が明治時代以降盛んに行われ、大分県内有数の畜産地域を形成しているほか、高冷な気候を活かしたトマトやキャベツなど野菜の一大生産地となっている。このように水利開発・交通網整備・農業基盤整備など諸産業の産業基盤の整備が行われ、竹田地域は奥豊後の中心地として発展していった。

竹田地域は祖母山北麓・阿蘇外輪山東側傾斜地・くじゅう連山南麓地域からの雨水等が大野川に集まる集水地域にあたり、明治以降たびたび記録的な豪雨被害に見舞われている。記録では明治 2 年（1869）6 月、大正 12 年（1923）7 月、昭和 28 年（1953）6 月、昭和 57 年（1982）7 月、平成 2 年（1990）7 月、平成 5 年（1993）9 月、平成 24 年（2012）7 月に大きな豪雨被害を受けている。豪雨災害により甚大な被害をなくすため、昭和 57 年以降河川改修事業や治水ダム建設が進められている。



平成24年7月の九州北部豪雨による竹田文化会館周辺被災状況

〈竹田市の沿革〉

明治 4 年（1871）の廃藩置県により、岡藩は岡県となった。その後大分県直入郡と定められ、明治 22 年（1889）の町村制施行により岡県は 19 町村に分かれ大分県の認可を受けた。平成の合併に至るまでの沿革を現竹田市へ合併した 1 市 3 町（旧竹田市・旧荻町・旧久住町・旧直入町）に分けて整理すると以下ようになる。

旧荻町の沿革は、明治 22 年（1889）の町村制施行により荻村、柏原村が発足し、昭和 30 年 4 月に荻村・柏原村が合併し荻町が発足した。

旧久住町の沿革は、明治 22 年（1889）の町村制施行により白丹村、久住村、都野村が発足し、大正 9 年 1 月に久住村が町制へ移行し久住町となり、昭和 29 年 3 月に久住町が白丹村を編入合併する。昭和 30 年 3 月久住町と都野村が合併し久住都町として発足するが、昭和 32 年 1

月に町名を久住町へ変更した。

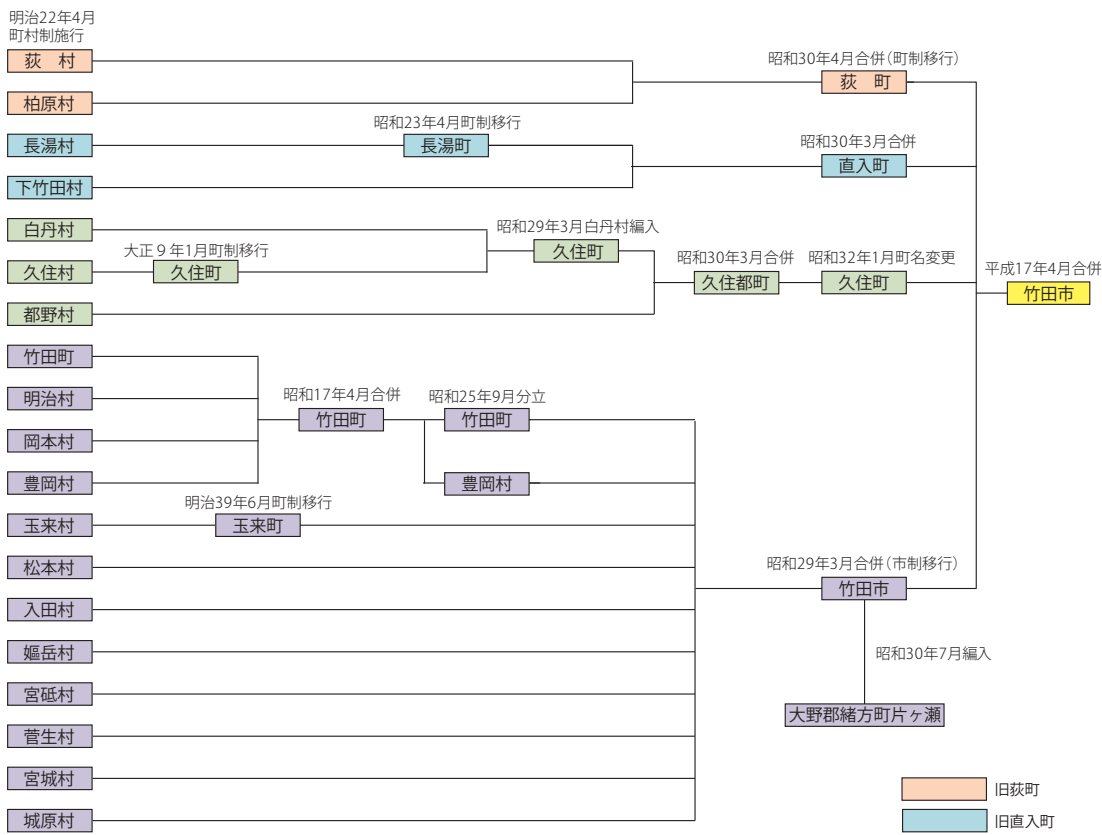
旧直入町の沿革は、明治22年（1889）の町村制施行により長湯村、下竹田村が発足し、昭和23年4月に長湯村が町制へ移行し長湯町となり、昭和30年3月に長湯町と下竹田村が合併し直入町が発足した。

旧竹田市の沿革は、明治22年（1889）の町村制施行により竹田町、明治村、岡本村、豊岡村、玉来村、松本村、入田村、^{な が ゆ} ^{しもたけ た} 姫岳村、^{にゅうた} ^{うばだけ} ^{みや ど} 宮砥村、菅生村、宮城村、城原村の1町11村が発足し、明治39年6月に玉来村が町制へ移行し玉来町となる。昭和17年4月竹田町・明治村・岡本村・豊岡村の1町3村が合併し竹田町となるが、昭和25年9月に豊岡村が竹田町と分立する。昭和29年3月に2町8村が合併し竹田市が発足した。

平成17年4月に竹田市と直入郡3町（荻町・久住町・直入町）が合併し、現在の竹田市が誕生した。



平成17年4月の合併以前の市町範囲図



竹田市の沿革

〈人 物〉



なかがわひでしげ

中川秀成 元亀元年（1570）～ 慶長 17 年（1612）

通称は小兵衛。摂津国（現在の大阪府の一部）の戦国武将中川清秀^{きよひで}の次男。天正 11 年（1583）に父清秀が賤ヶ岳で、天正 20 年に兄秀政^{ひでまさ}が朝鮮で戦没すると中川家の家督を継承し、播磨国三木城主となる。この頃豊臣秀吉の命により父を討った佐久間盛政^{さくもりまさ}の娘虎（洞仙院）と結婚する。文禄 2 年（1593）11 月に豊後国岡への転封を秀吉から命じられ、翌年 2 月に岡に入部し、初代岡藩主となる。

また、岡入部直前に従五位下修理大夫に叙任される。近隣の太閤蔵入地代官と連携して豊薩戦争・朝鮮出兵により荒廃した領内の立て直しを図りながら、支配の拠点として城閣と城下町を建設した。慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いにおいては、一時西軍への関与を疑われるが、西軍方の臼杵城主太田一吉^{うすき おおた かずよし}を攻めることで所領を安堵される。慶長 17 年（1612）8 月 14 日、岡城本丸において急死する。生前禅学修行の場所を建設する予定であった土地には、菩提寺^{へきうんじ}碧雲寺が建てられた。



なかがわひさきよ

中川久清 慶長 20 年（1615）～ 天和元年（1681）

通称は瀬兵衛。官位は従五位下山城守。第 2 代岡藩主中川久盛^{ひさもり}の長男として生まれる。父久盛の死により、承応 2 年（1653）藩主となる。初名は久秀、後に久清と改名。

藩主就任後、領内検地を行い生産力の把握につとめると共に、諸制度の改革を行い藩政の整備に力を尽くした。そのため「中興の祖」とも呼ばれている。万治 3 年（1660）には、岡山藩から陽明学者熊沢蕃山を招き、その指導の下で植林や水路開削などの政策を行った。在任中に岡城西の丸御殿を建設。隠居後はそこに居住し、藩政に強い影響力を持ち続けた。

藩政を整える一方、隠居後は入山と号するほど山を愛し、しばしば大船山（竹田市久住町）に登山した。久清は足が不自由だったため、人に背負わせた人鞍^{ひとくら}に乗って登ったと伝えられている。大船山をこよなく愛した久清は、自分の墓所を大船山に設けるように命じた。久清は遺言どおり大船山に葬られ、現在も儒教の形式に則った久清の墳墓がある。



た の むらちくでん

田能村竹田 安永6年(1777)～天保6年(1835)

諱は孝憲。通称は行蔵。号は竹田、遠声楼主、九疊外史など多数。
岡藩の侍医田能村碩庵の次男。

家業であった医者を経がず、寛政10年(1798)22歳の時に藩校由学館に出仕を命じられ学問専攻となる。同じころ、唐橋君山主宰の米船社・竹田社に加わり詩画に親しみ、淵野真斎から多くの影響を受けた。その後、「豊後国志」編纂御用掛、由学館頭取並を経て、文化10年(1813)に隠居する。

竹田は詩学の才能に優れ、各地の文人たちと幅広い交友関係を築いた。文政元年(1818)に頼山陽が竹田荘を訪問したことにより、全国的にその名声を高めた。

詩集「自画題語」や絵画論「山中 人 饒 舌」や茶本「泡茶新書三種」など幅広い分野の著作を残す。また、文化5年(1808)頃から作画に取り組み始め、隠居後に本格的に南画制作を行った。各地の画人たちとの交流を通して独自の作品世界(豊後南画)を展開した江戸後期を代表する南画家である。

遊歴先の大坂で客死。大坂の浄春寺に葬られた。また、遺髪を納めた墓碑が茶屋ノ辻にある。田能村竹田の旧宅である旧竹田荘は史跡に指定されている。



た の むらちよくにゆう

田能村直入 文化11年(1814)～明治40年(1904)

竹田市寺町に生まれる。本姓は三宮、通称伝太、名は癡。号は直入、小虎など。

田能村竹田に画を学び、天保5年(1834)に大坂にて大塩平八郎の洗心洞に入門。竹田没後に京都へ上った。

明治に入り各種展覧会で活躍する一方、京都府画学校[明治13年(1880)開学]設立に尽力し摂理(校長)として運営にあたるなど、関西南画界の重鎮の1人として多方面で活躍した。

また、明治17年(1884)、南宗画学校を創立し、田近竹邨など後進の育成に努めた。



ひろせ たけお

廣瀬武夫 明治元年（1868）～ 明治 37 年（1904）

しげたけ

岡藩士廣瀬重武の次男として竹田市茶屋の辻で生まれる。武夫は、父重武が明治維新後、裁判官として任務地を単身で転々とし、母は武夫が8歳のときに死去したため実質祖母智満子^{ちまこ}に育てられた。

明治10年（1877）5月、西南戦争により家が焼失したため、廣瀬家は父重武の赴任地である岐阜の飛騨高山へ住居を移した。

明治18年（1885）、海軍兵学校に入学。明治22年（1889）、海軍兵学校卒業後はハワイやオーストラリアへの遠洋航海で訓練を重ねる。明治26年（1893）には水雷術練習所に入り、同年に首席で卒業。その後も海軍で経験を積む。

明治30年（1897）6月、武夫はロシア留学を命じられ、9月からロシアのサンクトペテルブルクで留学生として生活を始めた。明治32年（1899）4月からはロシア駐在員として、ロシア国内および近隣諸国への視察を仕事とし、イギリス・フランス・ドイツへと赴く。明治34年（1901）10月に帰朝命令が下ると、翌年の1月よりシベリアを通るルートで帰国する。スレチェンスク～ハバロフスク間（約2,206キロ）はソリで極寒のシベリアを横断した。

明治37年（1904）2月10日に開戦した日露戦争では、軍艦「朝日」に乗船。同年3月27日に決行した第二次旅順港閉塞作戦にて、武夫は作戦遂行中にロシア軍の砲弾に倒れ戦死。死後、武夫は軍神として祭られ、昭和10年（1935）に廣瀬神社が旧竹田町に創建された。



たきれん たろう

瀧廉太郎 明治12年（1879）～ 明治36年（1903）

ひじ

たきよしひろ

旧日出藩士瀧吉弘の長男として東京で生まれる。父は内務省勤務。職業柄、横浜→富山→東京→大分→竹田と転任を繰り返し、廉太郎もそれに伴い一緒に各地を転々とする幼少期を過ごした。

明治24年（1891）11月、吉弘が大分県直入郡長に任命されたことにより、翌月一家で旧竹田町溝川の郡長官舎に転居。廉太郎は、明治27年（1894）4月に直入郡竹田高等小学校を卒業するまでの2年4ヶ月を竹田で過ごすことになった。多感な少年期を竹田で過ごした廉太郎は、南画家・佐久間竹浦^{さくま ちくほ}ら多くの友人に恵まれ、短い期間ながらも竹田の町は彼にとって思い出深い町の一つとなった。

幼い頃から音楽に関心が高く、自己流のヴァイオリンやハーモニカを友人の前で演奏していた。また、竹田時代にオルガン演奏を小学校の新任教員である渡邊由男^{わたなべよしお}に学ぶ。

高等小学校卒業後の明治27年（1894）9月、最年少の16歳で高等師範学校附属音楽学校（後

の東京藝術大学)に合格した。

演奏および作曲活動の出発点は明治30年(1897)、専修部2年生の時からである。研究科時代(明治31~33)には、演奏会での活動が充実しており、独奏する回数が増えるなど、音楽家としての将来が囑望されていたことが窺える。作曲活動においては、『荒城の月』、『花』、『箱根八里』などの代表曲をはじめ、『お正月』などの文部省唱歌やピアノ曲など日本近代音楽草創期において多彩な才能を発揮した。

明治34年(1901)に3年間の予定でライプチヒへ留学したが、滞在先で結核を患ったため翌年帰国。大分で療養するも、明治36年(1903)6月29日に没し、23年と10ヶ月の短い生涯を閉じた。



は ばらゆうきち

羽原又吉 明治13年(1880)～昭和46年(1971)

経済史学者。漁業経済史の開拓者。慶応義塾大学で長く教員を勤めた。竹田市久住町都野の漢方医羽原到の長男に生まれる。竹田小学校では瀧廉太郎せいでいこうと同級生。熊本済々黌、五高を経て東京帝国大学理学部で生物の研究を行う。大学卒業後、北海道庁に赴任する。道庁の調査員として漁村のアイヌの人々と接するうちに漁業の経済研究を行うようになる。羽原の研究の特徴は、それまで技術面が中心であった水産学において、新たに漁民の生活の立て方の変遷や流通面を解明したことにあった。昭和25年(1950)に『近世日本水産業の発展過程に関する経済史的研究』で慶応義塾賞を受賞し、同年経済学博士となる。翌年には日本漁業経済史の研究に対し朝日文化賞を受賞。昭和30年に『日本漁業経済史の研究』全4巻に学士院賞が贈られる。晩年の昭和43年に郷里都野に戻り、余生を過ごした。



あさくらふみ お

朝倉文夫 昭和16年(1883)～昭和39年(1964)

彫塑家。東京美術学校(現東京藝術大学)教授。文化勲章受章者。豊後大野市朝地あさじの渡辺要蔵・キミの三男として生まれる。10歳で同市朝倉種彦、ツ子の養子となり、旧制大分中学竹田分校(現竹田高等学校)に進学。明治35年(1902)に中退して、兄の渡辺長男おさおを頼って上京、住み込みながら彫塑の技術を学んだ。翌年、東京美術学校に入学、また太平洋画会研究所にも通った。この時から師の岩村透の教えで徹底した写実主義をとるように

なる。朝倉作品は流麗ながら写実に基づくわかりやすさが特徴で、描写力は抜群だった。

美術学校卒業時に東京都台東区にアトリエを新築し、朝倉塾を開設。学資に困る学生らを内弟子として教育した。



さとうよし み
佐藤義美 明治 38 年 (1905) ～ 昭和 43 年 (1968)

詩人。童謡童話作家。竹田市挾田の生まれ。「いぬのおまわりさん」の作詩者。竹田中学校に在学中の大正 9 年 (1920) に父の転勤に伴い横浜第二中学校へ転校する。この頃から詩や童謡の創作を開始する。東京に転居後は雑誌『赤い鳥』などへ投稿する。大正 14 年、早稲田第二高等学院の英文科に入り、石川達三たつぞうらと同人誌『薔薇盗人』を出す。この頃に「グッドバイ」を発表する。昭和 7 年 (1932) に大学院を修了して教職につくと同時に本格的な創作活動にも入る。次々に作品を発表し、昭和 16 年には教職を退くが、詩作は続け、生涯の作品数は 3,000 編にのぼる。金子みすずを評価したことで知られる。



いけまつたけ の すけ
池松武之亮 明治 45 年 (1912) ～ 平成 2 年 (1990)

医学博士。いびきの研究家。熊本県津奈木村出身。父親が荻町で開業するのに伴い、荻小学校に転校する。旧制竹田中学校、大邱医学専門学校 (韓国) を卒業して東京逋信病院などを経て、昭和 17 年 (1942) 千葉県野田市で開業する。いびき研究の契機は、昭和 27 年春、いびきが原因で嫁いだ初日に離婚された花嫁を治療したことであった。その後手がけた手術は 8,000 人にも上り、昭和 62 年 7 月にパリで開催された第 1 回世界いびき学会で名誉会長に就任した。文化面でも活躍し野田市文化団体会長などを歴任する。また、郷土荻町へ文化財資料館建設基金として長年多額の資金を寄付した。

(2) 竹田市の文化財の現状と特性

① 文化財の現状

現在（平成26年4月時点）竹田市にある指定文化財等は245件あり、その内訳は国指定等が31件、県指定が37件、市指定が177件となっている。

竹田市指定文化財等件数表

種 別	種 類	竹田地区	久住地区	荻地区	直入地区	竹田市	合 計
国指定等	史 跡	4				4	31
	重要文化財(建造物)	2				2	
	重要文化財(美術工芸品)	1				1	
	特別天然記念物	1				1	
	天然記念物	1	3			4	
	登録有形文化財	18				18	
	登録記念物			1		1	
	小 計	27	3	1	0	31	
県指定	史 跡	2		1	2	5	37
	名 勝		1			1	
	天然記念物	3	2	1	4	10	
	無形民俗文化財	2	1	1		4	
	有形文化財	13	2	2		17	
	小 計	20	6	5	6	37	
市指定	史 跡	13	7	15	1	36	177
	名 勝		3			3	
	天然記念物	9	4	2	10	25	
	無形文化財	1				1	
	無形民俗文化財	12	1	11	1	25	
	有形文化財	36	18	8	19	81	
	有形民俗文化財	3	1	2		6	
	小 計	74	34	38	31	177	
合 計		121	43	44	37	245	

1) 国指定文化財

竹田市にある国指定文化財 12 件のうち、重要文化財が 3 件、史跡が 4 件、特別天然記念物が 1 件、天然記念物が 4 件となっている。

重要文化財の建造物は、寛永 12 年（1635）建立の竹田市最古の木造建築物の願成院本堂と昭和 13 年（1938）に竣工した市内の農業土木遺産を代表する白水溜池堰堤水利施設がある。願成院本堂（愛染堂）は、比較的小規模な仏堂であるが、三手先斗供、二軒扇垂木とするなど手の込んだ構造を用いており、内部に柱を立てず、丸桁上に梁を架け渡さない構造を採用している。細部では隅の肘木に鬼面を彫り、隅の持送の上に邪鬼の彫刻を置いて隅木を支え、尾垂木上の各斗の斗尻には、別木を差し込んで皿斗にみせかけるなど特徴的な手法が用いられている。内部の内法上には極彩色の天人像が描かれている。

美術工芸品では、「十字章」と「HOSPITAL SANTIAGO 1612」の銘が刻まれた南蛮鐘である銅鐘がある。

史跡は、岡藩主中川家の居城であった岡城跡、豊後南画の祖田能村竹田の旧宅である旧竹田荘、前方後円墳 2 基、円墳 2 基が現存する七ツ森古墳群、歴代岡藩主の墓所である岡藩主中川家墓所がある。岡城跡は、文治元年（1185）に源平の雄緒方三郎惟栄が源義経を迎える為築城したとの伝承があり、さらに、建武年中（1334～1337）に大友の支族である志賀貞朝が拡大したと云われている。しかし、これを裏付ける正確な資料はなく、今日の岡城の前身となる城は、応安 2 年（1369）頃に志賀氏の居城として築城されたとされる。文禄 3 年（1594）に播州三木（兵庫県）より中川秀成がこの地へ入部し、現在残される平山城形式の城郭が造られた。城内には、本丸跡・二ノ丸跡・三の丸跡・西の丸跡の外にも櫓跡・家老屋敷跡・武家屋敷跡・足輕屋敷跡など、天然の地形を生かした数多くの遺構が残されている。



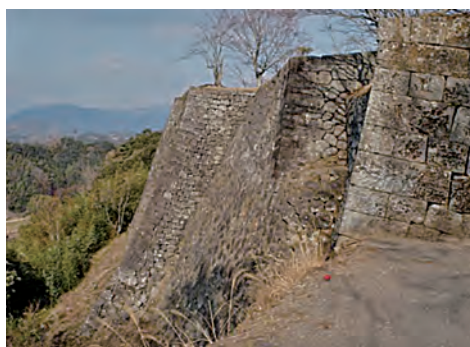
願成院本堂（愛染堂）



願成院本堂内部に描かれた天人像



岡城跡全景



岡城跡三ノ丸跡石垣

特別天然記念物のカモシカは、市南部の祖母山系に生息する。また天然記念物は、西日本では稀産とされ九州では久住連山のみ植生するツツジ科の低木である九重山のコケモモ群落、九州地方の特産種であり丘陵地の火山地帯の風衝地に群落をつくるミヤマキリシマの代表的群落である大船山のミヤマキリシマ群落、九州で唯一黒岳周辺に生息する大型の猛禽類であるイヌワシ、阿蘇山火砕流により形成される竹田の阿蘇火砕流堆積物がある。

2) 県指定文化財

大分県指定文化財 37 件のうち、史跡が 5 件、名勝が 1 件、天然記念物が 10 件、無形民俗文化財が 4 件、有形文化財が 17 件となっている。

有形文化財の建造物は、嘉永 2 年 (1849) に架設された石橋である岩戸橋、天文 18 年 (1547 年) の銘のある円福寺石幢など石造物が 5 件、美術工芸品では中川家歴代藩主肖像画など絵画が 5 件、彫刻が 6 件となっている。



岩戸橋

岩戸橋は、嘉永 2 年 10 月に架設のアーチ型の石橋で、橋長 28.2m、幅 4.40m、高さ 18.00m、橋台 11.40m で大分県においては 3 番目に古い石橋である。

史跡は豊後キリシタン布教地の一大中心地であった志賀・朽網の伝承を偲ばせるキリシタン洞窟礼拝堂、岡藩主中川家ゆかりの寺である西光寺境内、凝灰岩の壁面に刻まれた五輪塔中に座す観音菩薩、大日如来を線刻で表現した長湯線刻磨崖仏及び梵字石、T 字型の墓碑に「INRI」の文字を彫り込んだ原のキリシタン墓碑や縄文時代の人骨や大理石製のケツ状耳飾りが出土した野鹿洞穴が存在している。キリシタン洞窟礼拝堂は、建設年代は不明であるが、岩壁をノミで彫り抜いたみごとなものであり、内部は約 10㎡でドーム型の天井の最高部は約 3.5m に達する。正面には祭壇状の彫り込みがあり、土色をもって彩色が施されている。腰の高さほどのところの壁の周り



キリシタン洞窟礼拝堂

に丸太を通して床を張るためのくぼみが作られている。正面入口の裏側には両隅に直径 20cm 以上の木柱が仕組まれて扉を閉めるようになっていたものと思われる。

名勝は、湧水地の周辺を杉、タブ、カシの古木が生い茂る日本式庭園の納池公園がある。元徳 2 年 (1330) に白丹南山城主志賀義天公の遊樂地に利用されたのに始まり、江戸初期には肥後藩主加藤清正も公衆の遊樂地にしたという。明治 6 年 (1873) 太政官布告により東京の

浅草・上野、京都の嵐山などと並んで地域公園とされた由緒ある公園である。更に大正 13 年 (1924) には大分県 13 景の一つに選ばれた。

天然記念物は市内南部地区のメンノツラ谷に生息する祖母山系イワメ、流れの速い清流の転石や水際近くの岩肌に付着する陽目のカワノリ、建男霜凝日子神社の神原のトチ、宮砥八幡社の社叢、市内北部地区の粉山八幡社の大ケヤキ、宮処野神社の社叢、久住のツクシボダイジュのほか 3 件がある。



納池公園

無形民俗文化財は城原八幡社の神輿の先伴をする阿鹿野獅子舞、享保年間の文献に見られる演目を古い姿で保ち続けている宮砥神楽、荻神社ゆたて、宮処野神社の神保会行事（県選択無形民俗文化財）があり、市内でも特色のある民俗芸能及び行事が指定されている。宮砥神楽は、寛文 10 年 (1670) の記録に神楽殿を改造した事が記されていることから、17 世紀末に神楽が存在したこととなり、大野川流域に存在する神楽の中では最も古く成立したとされる。神楽面の記録などから、その創始は中世まで遡る。他の流派の神楽が演劇化されていく中で、現在も享保 3 年 (1718)



宮砥神楽

の文献に見られる演目を、古い形で保ち続けている、伝統を重んじた神楽であり、衣装は、狩衣が多用され、舞方も古い様式を残している。

3) 市指定文化財

市指定文化財 177 件のうち、史跡 36 件、名勝 3 件、天然記念物 25 件、無形文化財 1 件、無形民俗文化財 25 件、有形文化財 81 件、有形民俗文化財 6 件となっている。市指定文化財の約半数が有形文化財となっており、その内訳は、15 件が建造物、25 件が石造物、仏像・絵画等が 41 件となっている。建造物は、長屋門形式に禅宗様の門扉を配した円通閣、元禄 4 年 (1691) に建築された大分県最古の袴腰付の西光寺鐘楼、藩校由学館の門など城下町に關係するもの、農業用水石橋水路橋の若宮井路橋などをはじめとする石橋がある。石造物は、中世末期の六地藏信仰に基づき建立された植木の地藏塔や東福寺供養塔などがある。絵画等では田能村竹田初期の作品である「紙



円通閣



西光寺鐘楼

本墨書淡彩河豚図」(田能村竹田筆)や岡城の鳥瞰を描いた「紙本著色御城真景図」(淵野真斎筆)などがある

史跡は、岡藩営の宿泊所であり伊能忠敬が宿泊した御客屋敷、名勝は竹田久住と天領日田を結ぶ日田往還の街道沿いに肥後藩主により植えられた松並木、野焼きにより人工的に維持されてきた草地である南登山口のネシバ・ノザサ群落等、天然記念物は城原神社社叢・鹿伏山自然林等 25 件すべて植物となっている。

無形民俗文化財 25 件のうち 20 件が神楽・獅子・^{はくま}白熊の伝統芸能となっており、他に姫だるま製造技術、庚申講、久住^{なごしまつり}夏越祭の曳山行事、^{ねぎのじんじやびょうけさい}禰疑野神社病除祭、無形文化財は和紙製作技術がある。



久住夏越祭の曳山行事

有形民俗文化財は元文 3 年 (1738) の銘のある神原獅子舞の獅子頭、嘉永 7 年 (1854) から恵比須講の様子を記録した文書の下本町下組恵比寿講文書、明治 13 年 (1880) に建築された石積みの壁に竹瓦葺の屋根を持つ相ヶ鶴井手家の石蔵等がある。



相ヶ鶴井手家の石蔵

4) 登録文化財

登録文化財は登録有形文化財が 18 件、登録記念物が 1 件となっている。登録有形文化財は明治 44 年～明治 45 年 (1911～1912) に造られた井路である明治岡本井路 (石垣井路)、大正 6 年 (1917) に架設された石造 2 連アーチ橋である若宮井路笹無田石拱橋の農業遺産が 2 件、元治 2 年 (1865) に建築された商家である塩屋土蔵 (主屋・中蔵・古蔵)、明治 12 年 (1879) に武家屋敷の部材を買取り建築された佐藤家住宅 (主屋・旧店舗兼主屋・旧味噌蔵・土蔵)、明治 11 年 (1878) に酒屋を営むために建築された吉川家住宅 (主屋・土蔵・倉庫一・倉庫二・倉庫三) 等の建造物が 16 件あり、これらは全て城下町内にある。



佐藤家住宅

登録記念物 (名勝) は、荻地区大野川の最上流部に位置し、阿蘇溶結凝灰岩の峻険な岩盤を伝い流れる幾多の滝筋により構成される白水の滝がある。



白水の滝

5) その他の文化財

竹田市には詳細な調査が行われていないため、未指定であるが、数多くの文化財が存在する。有形文化財では、明治 25 年（1892）に竣工した音無井路^{おとなしいろ}の受益地へ水を適切に配分するため 12 か所の窓を設けた特異な構造の 12 号分水（昭和 9 年完成）、第 1 拱石橋（大正 8 年完成）をはじめとする石橋水路・隧道・用水路などの施設を有する大正 13 年（1924）に竣工した明正井路など、農業近代化遺産をはじめ、城下町内には近世～近代の武家屋敷や町家が残されている。

また、無形民俗文化財についても、県選定無形民俗文化財である宮処野神社に伝わる神保会行事の構成要素となっている明治初期に豊後大野市朝地町の深山神社大野郡岩戸神楽の指南役石川達により神楽を伝承され「宮處野神社付属楽員」^{みやどころのじんじゃ ふ ぞくがくいん}として発足した都野神楽、伝授書「御獅子濫觴」に安政 4 年（1857）に豊後大野市朝地町綿田^{わた だ たわらずみみや}の俵積宮から伝授された事が記された仏原獅子、安政 3 年（1856）に豊後大野市朝地町中熊村の烏嶽宮から御嶽流獅子舞として伝授している事が記されている下河原獅子舞、同じ宮処野神社に奉納される下河原獅子舞から舞方が伝授された御嶽流の突き獅子の桑原獅子舞、文政 12 年（1829）に岡藩のお供頭より伝習したもので、大形流白熊練の伝統を直接に継承している点で大変貴重な有氏組白熊、文久元年（1861）に豊後大野市朝地町の深山神社から伝授された宮処野神社吉野流白熊など、市内各所に獅子舞や白熊等の伝統芸能や恵比須講・庚申講などの民間信仰が今もなお地域の人々により伝承されている。



音無井路 12 号分水



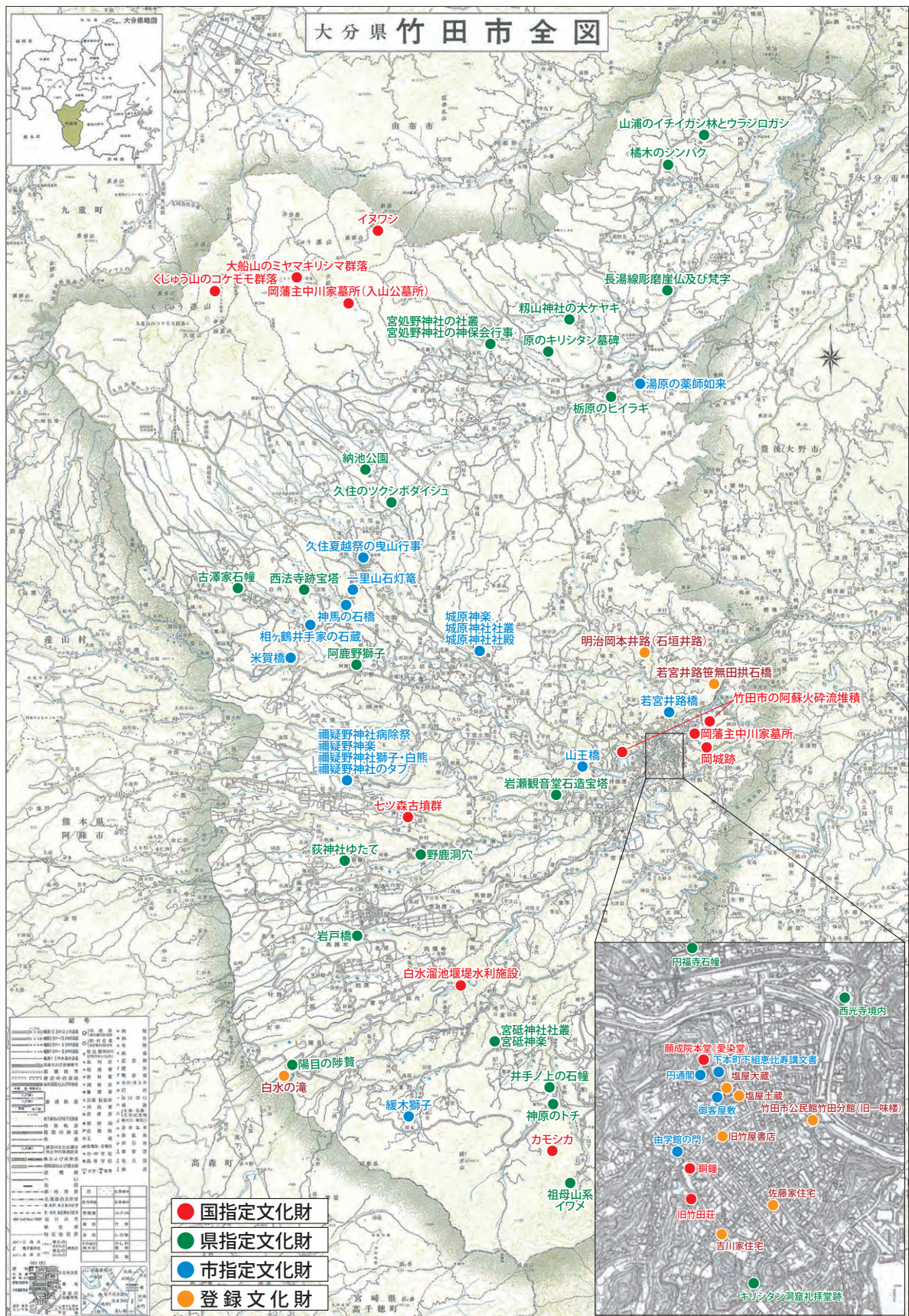
明正井路第一拱石橋



都野神楽



仏原獅子舞



主要指定文化財分布図

② 文化財の特性

市内の文化財の特性を把握するため、歴史的条件・地理的条件・文化的条件を基に、3つの区域を設定し特性を整理した。

1) 城下町に関わる特性

岡藩城下町は、江戸時代以降奥豊後における政治・経済・文化の中心地として栄えてきた。今もなお城下建設当時の町割りの中で住民が生活し、史跡旧竹田荘や重要文化財願成院本堂（愛染堂）をはじめとする歴史的な建造物が数多く残されている。

城下町建設は中川秀成入部後の文禄3年(1594)に着手された城築造と同時に行われた。中川秀成は大友氏支族の志賀氏の居城を基とし、近世的な城郭の築造を行った。入部から4年目の慶長元年(1598)には岡城築造は一応の完成を見る。城下は岡城の西方約1kmの稲葉川南岸に開けた竹田村を城下建設の地に選び、湿田を埋め、林や藪を切り開き、玉来や志賀氏時代に城下であった挾田や十川から民家を移して町家の建設を行った。城下構造は基盤目状に区画された町割りの中央部に本町・上町・田町等の町家が配置され、町家群を取り囲むように、武家屋敷（殿町・代官町・向丁等）や寺院（寺町）を配する構造となっている。また、寛永7年(1630)に古町を町家に組み込み現在に残る城下の町割りが完成した。

城下町に見られる祭礼は、夏越祭・八朔祭・善神王様祭・恵比寿講・野狐祭等、江戸時代以降城下内の町家を中心に現在まで継続して行われている。祭礼の構造は、城下の町割と密接な関係を持っており、西宮神社の本町組（本町）、神明社の古町組（古町）、岡神社の東部祭組合（上町・田町・新町・府内町）の3つの祭組合が各所属神社の祭礼を催し、各祭組合を構成する組（通り）ごとに恵比寿講が組織されている。また、城原八幡社の御下りである夏越祭は、各祭組合が交代で受元となり開催を行っている。（城下町の町割りと祭礼に見る特性）

また、城下町は豊後南画の祖田能村竹田・明治期の日本における代表的な作曲家瀧廉太郎・武人廣瀬武夫・童謡作家佐藤義美などの偉人を数多く輩出する土壌を培い、今なお当時の面影のままの町並みから歴史と文化を感じることができる。市内では、これら郷土の偉人を顕彰する活動が盛んに行われており、田能村竹田顕彰会・瀧廉太郎会・廣瀬武夫顕彰会・よしみ会などが組織され、顕彰活動が行われている。（郷土の偉人の顕彰活動にみる特性）

○城下町の祭礼に見る特性

城下町と夏越祭

西宮神社と八朔祭

岡神社と善神王様祭

神明社の大祭

城下町の町割りと恵比須講

○郷土の偉人の顕彰活動に見る特性

旧竹田荘と田能村竹田顕彰活動

瀧廉太郎旧宅と瀧廉太郎顕彰活動

廣瀬神社と廣瀬武夫顕彰活動

さとうよしみ記念館と佐藤義美顕彰活動

2) 南部地区に関わる特性

竹田市南部地区（入田地区、^{にゆうた} 入田地区、^{うばだけ} 姫岳地区、^{みやど} 宮砥地区、^{かしわばる} 柏原地区）は、祖母山系から派生する急峻な地形により水田耕作には適しておらず、古くから畑作が主要な農業となっていた。しかし、祖母山から湧き出す豊富な湧水を源とする大野川を利用し、近代以降、耕作地に農業用水を供給する水利施設が盛んに建設され、それらの灌漑施設は、農業関連の近代化遺産として現在でも利用されている。また、谷筋に展開する農村地帯では豊作を祈願する祭が各所で行われ、祭に奉納される神楽・獅子舞・白熊が数多く伝承されるなど、棚田や井路等の農村風景と豊作を祈願する民俗芸能が一体的に保存されている。（農業近代化遺産に見る特性）

○農業近代化遺産に見る特性

井路等の維持管理（音無井路・富士緒井路・明正井路・棚田）

3) 北部地域に関わる特性

竹田市の北部地域（久住地区・直入地区）は、くじゅう連山の裾に広がる高原地帯である。久住高原は近代以降、畜産の放牧地・採草地として利用され、春には野焼きを行い高原草地の維持を行ってきた。（高原景観の維持に見る特性）

この北部地域は、藩政時代に肥後領であった久住地区、「朽網（くたみ）」と呼ばれ中世期にこの地域の中心地として栄えた都野地区、近世以降に湯治場として開けた長湯地区があり、それぞれの地区の歴史的背景を由緒とする街環境を見ることができる。

久住地区は、豊後と肥後を結ぶ肥後街道、竹田と日田を結ぶ日田往還が交差する交通の要衝であり中心部久住は宿場町として栄え、また江戸時代を通じ肥後藩の代官所が置かれ、久住・

小国（熊本県小国地域）地域支配の拠点となった。久住では8月に久住神社の夏越祭が開催される。

都野地区は、大船山麓に広がる高原地帯で、古代から朽網郷の中心地として栄えた。江戸時代には七里田温泉に藩の御茶屋が建設され、3代藩主中川久清は大船山に登り軍事訓練を行い、その墓所も大船山の中腹に造られている。都野地区に鎮座する宮処野神社は景行天皇と嵯峨天皇を祀る神社で、秋には神保会（県指定無形民俗文化財）が行われる。

長湯地区は、古くから温泉地として知られており、「豊後風土記」にも記されている。室町時代には朽網郷の領主である朽網氏の管理下に置かれていたことが文献に記されている。江戸時代になると岡藩により湯屋や御茶屋が建設された。長湯温泉は湯治場として整備され、岡藩歴代藩主や幕府からの巡見使も湯治に訪れている。長湯温泉（湯原温泉）にある湯原薬師堂に温泉の守護神である薬師如来と地藏菩薩が安置されている。湯原薬師堂では、温泉による諸病退散を祈願した温泉供養が行われる。（北部地域の祭に見る特性）

○高原景観の維持に見る特性

久住高原の野焼き

○北部地域の祭に見る特性

久住神社と久住夏越祭

宮処野神社と神保会行事

湯原薬師堂と温泉供養